

『憧れの女将さん』

「ねえ、ちょっとあなた、いい？」

「え？ 今いいとこなんだよお。もうちょっとで終わるからさ」

「またそうやってサスペンスドラマばかり見て。なんでそんなに事件が好きなの？ あなたの人生になんの役にも立たないじゃないの。なんかあったらすぐ崖に行くんでしょ？ 崖に行って解決するんでしょ？ 崖に行くだけで解決できるなら苦労しないでしょ。あなたの人生には崖も事件もないんだから、見なくていいでしょ」

「なんでそこまで言われなきゃいけないんだ。お前はサスペンスドラマの発想が古いんだよ。今どきはそんなのばかりじゃないよ。これから刑事が犯人を追い詰める良いところなんだから、あと10分待ってくれよ」

「追い詰めるってどこに追い詰めるの？」

「…崖」

「崖なんじゃないの、やっぱり！ もういいから、話を聞いてちょうだい（テレビを消す）」

「あ、お前、一番モヤモヤするところで止めたな！ これから解決編だったのに。なんだよ。そんなに急ぎの話なのか？」

「そう。大事な話なの」

「大事な話？」

「そう。あのね、私ね、新たな組織を結成しようかと思って」

「はあ？ なんだ、そりゃ。新たな組織？」

「そう。というのもね、この前さ、あなたさ、私にお休みくれたでしょ？」

「ああ。お休みね。まあおれと違って主婦のお前は休みっていう休みがないからな。たまには羽を休めてもいいんじゃないかと思って。お休みにしていいからって。家のことはこっちでやるからって。まあ日頃の感謝の気持ちだな」

「そうそう、それ。それ言ってもらった時は嬉しくてねえ。お休みだなんて何をして過ごそうかしらと思って。うちの社宅の奥さん何人かで温泉に行ったでしょ？」

「ああ。楽しかったんだろ？ 良かったじゃないか」

「そう。楽しかったの。みんなで温泉に入って、おいしいごはんを食べて、たくさんお喋りして。…でも、なんであんなお休みくれたの！？」

「ええ？ 情緒がどうなってんだよ。喜んでたと思ったら急に怒りだして」

「あのね、あなたは頑固一徹じゃなきゃいけないんだから。私にお休みなんかくれちゃ駄目でしょ！？」

「なんなんだ一体。こっちは労いの気持ちでしたことなのに。だいたいおれは頑固一徹なんて性格じゃないの、お前が一番よく知ってんだろ？」

「だからあなたは上に行けないの！」

「痛たたた。ちょっと待ってくれ。なんの話だかよく分からないなあ。新たな組織ってのはいつ出てくるんだ？」

「あ、そうそう。ごめんね。もう今ね、熱い思いでいっぱいなの。新組織の結成に向けて張り切っちゃってて」

「だから早く話を前に進めてくれよ。どういうことなんだ？」

「あのね、私達が行った温泉街っていうのがさ。ほんとにたくさんの宿があってね。どこに泊まろうか迷ったくらいだったんだけどさ。そこに女将さん会っていうのがあったの」

「女将さん会？ 女将さんって、宿の女将さんってこと？」

「そうそう。それぞれの宿に女将さんっていう立場の人はいるわけでしょ？ それが集まって女将さん会っていうの作ってるんだって。主に情報交換したりとか、親睦を深めたりとか、勉強会を開いたりとか、街のPR活動なんかをしてるみたいなの」

「へえ。でも宿の女将さん同士だと、競争相手ってことなんじゃないの？ それが集まって仲良くしてるってこと？」

「そうそう。私もそこが面白いなあと思ったんだけどさ。対抗意識とかってより、街全体を活気づけたいっていう共通の目的があるわけ。若い人が来たら教えたり、若い人は先輩から学んだり、すごくうまくいってるみたいなの」

「なるほどね。まあそんな温泉街の方が珍しいんだろうけどね。お前が行ったところはそうだったんだ？」

「そうね。でね、話を聞いてて私達も思ったの。これやりたい！って」

「え？ やりたい？ なにを？」

「だから、女将さん会」

「女将さん会をやる？ なんで？」

「かっこいいじゃないの。聞いたらもう、ああいう歴史ある温泉宿って、やっぱり厳しいとこ

ろもあるみたいなのね。大変だったのは育児をしながら、ちゃんと女将さんをやったりとかしてたんだって。赤ちゃんを背中に乗せながら掃除したり仕事して。あとほら、ああいうところは朝も早いし、色んなお客さんが来るのをちゃんと接客して、宿で働いてる人の人間関係もまとめなきゃいけないし。そういうのを全部やってきた女将さん、ああ、かっこいい！」

「い、いや、それは分かったけど。お前がそれをやるってのはなんなんだ？」

「だから、この社宅の奥さんみんなで、奥さん会を作るの」

「…なんで？」

「だから！　なんでこの人はわかんないの。すごいかっこいいんだから。宿の女将さんって」

「うん。でもお前は宿の女将さんじゃないだろ？　サラリーマンの妻だろ？　そんなもん作ってどうすんだ？」

「どうするとかじゃないの。やりたいの！　一緒に行ったみんなで言いながら帰って来たんだから。『あれやりたいね？』『うん、やりたいやりたい』『やりたいね！』って」

「…まあやりたいんだったら、勝手にやればいと思うけど」

「なにその勝手についていうのは。あなたも協力すんのよ」

「え？　おれが？　おれも奥さん会に入るの？」

「違う違う。なんであなたが奥さん会に入るのよ。これは私たちのものなんだから、入って来ないで！」

「や、だって協力っていうから。おれは何をすんの？」

「だからさ、宿の主のようにさ。でんと構えて頑固一徹で、私達に偉そうにして頂戴」

「頑固一徹がそこに繋がるのか？　や、なんでそんなことしなくちゃいけないの？　おれ温厚な性格なんだけど」

「知ってるわよ。優しく柔軟性あって、お休みをくれたりして妻を大事にして、ほんとにこの人は駄目な人」

「良い要素しかないじゃないか。おれは別に宿の主じゃないんだから。これでいいんだよ」

「駄目でしょ、それじゃ。私が奥さん会を結成する意味がないじゃない！　厳しくて勝手なことも言ったりして、私達がちょっと愚痴をこぼしたりできるような、そんな人をやって頂戴」

「ちょっと待てよ。お前たちが奥さん会なるものを作りたいがために、おれはそれに協力して性格を変えなきゃいけないのか？」

「そりゃそうでしょ。だって奥さん会を作る理由として、女将さんの大変さをみんなで共感し

あうっていう、そこが大事なんだから。大変な思いを私にさせて頂戴」

「じゃあ、おれはドラマを見るから。このへんを、か、片付けとけ！」

「なにその言い慣れてない感じ」

「言い慣れてないんだよ。おれは人に偉そうに指示を出すのとか苦手なんだから」

「駄目ねえ、もう。じゃあちょっと、つよしにも協力してもらいましょ」

「つよし？ あいつも参加するの？」

「そうよ。私が一番かっこいいなと思った部分はね。やっぱり育児をしながら女将さんをやっ
たっていう、そこなの。赤子を背負ったまんま、お掃除をしたりなんかしたっていう、そこね。
だからうちのつよしを背負って、この社宅の入り口を掃除しようと思ってんの」

「つよしもう高校生だぞ。あんなデッカいの背負って掃除すんの？」

「大丈夫よ。つよしは私のこと大好きなんだから、ちゃんと協力してくれるはず」

「いや、そっちじゃなくて。つよしの方がお前より体重があるんだぞ。さすがに背負うのは無
理じゃないか？」

「それくらいのことにはやらなくちゃ。女将さんには到底、及ばないわ」

「本気なのか。どんどん心配になってきたな」

「あとは、そうねえ。クレーマー対応とかね、そういうのも大事みたいね」

「クレーマー？」

「そう。なんかね、出したお料理にケチを付けて、宿泊代を値切ってきたりするお客さんもい
るみたいなの。そういうのを全部、自分で対応して処理するの。ああ、かっこいい」

「憧れがすごいな。でもこの社宅にクレーマーなんか来ないだろう」

「あとはPR活動ね。これは難しいわねえ。PRするものが特にないからね」

「そりゃそうだよ。この社宅をPRしてもしょうがないんだから」

「うーん。まあそこはあれかしら。サラリーマンのPRってことでいいかしら」

「サラリーマン全体の？ 一体なにをしてんだ、それは」

「いいのよ。私達は奥さん会ができればそれでいいんだから」

「めちゃくちゃだなあ」

「ちょっと、佐藤さんとこの奥さん、情報交換しましょ。奥さん会しましょ」

「ええ、しましょしましょ。えっと、なんかあった？」

「そうね。えっと、うーん、そうね。特に私はないわね」

「あ、そうなの？ この社宅でなにか問題が起きたりとか、してない？」

「うん、してない」

「そう。実は私も何もないの。うーん、ちょっと情報交換にならないわね。あ、金田さんとの奥さん、情報交換しましょ。なにかあった？」

「あったあった。吉岡さんとの浩司くん、私立の小学校に受かったんですって」

「あら、そう。そうなの。へえ。あの子は利発そうな感じするもんねえ。…ちょっと待って。これじゃただの井戸端会議だから。もうちょっと情報っばいことない？」

「なにかあったかしらねえ。うーん。まあ今日も平和ね」

「平和よね。確かにね。うん。平和平和。じゃあ平和という情報を交換しときましょ。他の奥さん会メンバーにも伝えておいて。『今日も平和』って」

「分かった。必ず伝えておくから。あ、船井さんとの奥さん、つよし君を背負って入り口を掃除してるわ」

「(腰を曲げて) みんなー、はあ、はあ。私、いまここを掃除してるの。ちょっと写真を撮ってくれない？ かっこいいかしら？」

「まあ、すごい！ 女将さんっばい！ 船井さん、かっこいいわ！」

「ちょっと、お母さん！ もうおれ降りるからさ！ 恥ずかしいよ！」

「いいの！ 降りちゃ駄目！ 女将さんたるもの、育児をしながら掃除って決まってるんだから！ はあ、はあ。ああ、きつい…」

「きついって言ってるじゃないか！ おれもう来年には選挙権を持つんだよ。育児って年齢じゃないよ。もうやめなよ、こんなの！」

「駄目！ 降りちゃ駄目！ このきつさこそが女将さんの証なの！」

「…すごいわねえ、船井さん。あそこまで出来ないわ。あれ？ あそこで郵便配達員のお兄さんがなんか困ってるみたい。どうかしましたか？」

「あ、いえ、ちょっとこの郵便物が大きくてポストに入らないみたいで」

「…申し訳ございません！！」

「び、びっくりした。え？ なんですか？」

「クレームですよ？ それクレームですよ？ 申し訳ございません！」

「い、いえクレームとじゃじゃないですよ。大丈夫ですよ。直接、行ってチャイム鳴らして渡

しますんで」

「申し訳ございません！ おいくらほど値引きすればよろしいでしょうか？」

「値引き？ どういうことですか？」

「あ、じゃあもうこの切手代を割引しましょう。(荷物の切手部分を破く)」

「ちょ、ちょっと！ なにやってるんですか！ こちらの届け先のお宅の方なんですか？」

「いえ、全然ちがいます」

「じゃあ、駄目ですよ！ こんなことしちゃ！ なんだこの社宅！」

「はあ、今日も疲れたなあ。ちょっと飲んでから帰ろうかと思ったけど、つよしの大学進学も控えてるしな。おとなしく帰ろ。…ん？ なんだ？ 駅前にいっぱい人が…。え？ うちの社宅の嫁連中じゃないか。なにやってんだ？ うちの〇〇もいるぞ」

「サラリーマンをよろしくお願いします！ ただいまサラリーマンのPR活動をしております！ この社宅に住んでいるのはみんなサラリーマンです！ サラリーマン、頑張ってます！ サラリーマンが日本を支えております！ サラリーマンは素晴らしい！ サラリーマン万歳！ みなさん、サラリーマンをどうかよろしくお願いします！」

「恥ずかしい…。なにやってんだ、おい！ 『サラリーマン頑張れ』ってチラシを配ってるじゃないか！ ばか！ 〇〇！ もうやめろ！」

「あら、あなた！ PRしてるわよ」

「やめなさい、こんなこと！ なんの意味があるんだ！」

「あ、そうだ。あなた、報告があるわ。『今日も平和です』」

「なんの報告だ！ サスペンスドラマよりよっぽど事件だよ」

おわり

